

研究ノート（査読なし）

山背古道の実践と「動機のデザイン」の原点
—大きなプロジェクトの小さな現場から—

由 井 真 波*

小 野 文 子**

要 旨

本稿は、筆者が約 30 年前に企画・デザインの専門家として立ち上げから関わった、広域的なまちづくり事業「山背古道（やましろこどう）」の実践をふり振り返り、後に「動機のデザイン」という考え方に至る原点を、実践の記述を通して確認しようとするものである。

「動機のデザイン」は、関わる人の主体性や自走を重視する考え方であり、これまで書店や和菓子店など「小さな現場」を前提としてその実践を論述してきた。一方、山背古道は行政の呼びかけから始まり、地域住民や商業者など、多様な主体者がゆるやかに連携し、独自の取り組みを生み出しながら現在まで 30 年以上にわたり継続する、全体として大規模なプロジェクトである。

当初、住民らの「参加」を標榜するも、ほとんどの関係者がワークショップを未経験であり、コンセプトである「探検」の意味も手探りでスタートした。実験的な開催を重ね、この探検を軸に、関わり方やスタイルの異なる数々の活動が地域に生まれ、自律的に展開されていった。

筆者は立ち上げ期より、ルートの選定、探検活動の企画・運営、白地図や埋め込みサインなどのツールのデザインや、関係者への働きかけなどを行い、プロジェクトの推進と展開に寄与した。それは一方的な先導ではなく、模索の連続であり、互いの反応を手がかりとして確認しながら、段階的に広がっていった。その実践の舞台となったのが、参加する顔ぶれが都度異なる、数々の「小さな現場」であった。

当時は無自覚であったデザイン実践の試行錯誤の中に、「動機のデザイン」へと繋がる試みや考え方が包含されていたと考える。これらをふり振り返り、今後のさらなる考察へとつなげたい。

キーワード：動機のデザイン 共創 自律的活動 小さな現場

- I. はじめに
- II. 山背古道の取り組み概要
- III. 取り組みの実際とデザイン行動
 1. 山背古道と「探検」の立ち上がり
 2. 歩きながら見えてきたこと
 3. 会議からワークショップへ
 4. 参加の裾野を広げる仕掛け
 5. 多様な主体による活動の広がり
- IV. まとめと考察
 1. 大きなプロジェクトの小さな現場で
 2. 「やってみる」ことで立ち上がる概念
 3. 多様な主体による自律的な活動へ
 4. 動機のデザインへ

* 有限会社リンク・コミュニティデザイン研究所 代表、成安造形大学芸術学部 客員教授

** 有限会社リンク・コミュニティデザイン研究所

I. はじめに

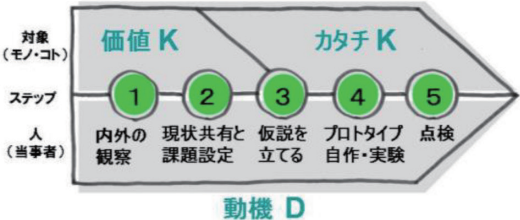
本稿では、筆者が約 30 年前に関わった山背古道（やましろこどう）の取り組みをふり返る。後に「動機のデザイン」という考え方を提示することになる筆者にとって、本事例は、その発想に至る契機となる経験を数多く含んだ取り組みであり、原点であったとふり返られるものである。

2017 年に「動機のデザイン」の概念を初めて提示したとき¹⁾から、筆者がこれまで紹介してきた事例は、書店、和菓子店や町工場などの「小さな現場」での実践を前提としてきた。一方、山背古道は、複数の自治体にまたがり、長期間にわたって多くの人が関わった取り組みである。行政の呼びかけからスタートし、有志団体が立ち上がり、住民が参加・交流するソフト事業が牽引する形で、複数のハード整備事業が実施されるに及び、地域の商業者が加わるなど、規模や担い手が変わりつつ現在も継続されている。

個々のイベントの参加者を含むと、のべ数千人が関わった本取り組みは、全体として大きなプロジェクトに見えるが、その大きな流れの中では、いくつもの多種多様な「小さな現場」が立ち上がっていた。

本稿では、この取り組みの概要と、動き続ける現場の中で筆者が実践したデザイン行動を記述し、「動機のデザイン」のさらなる考察へと資することを目的とする。

表 1. 「動機のデザイン」の概要

動機のデザインとは： 対象となるモノ・コトの価値をつかみ出し、それをカタチに現すデザインを実践するプロセスにおいて、同時に、その取り組みに関わる人の「動機」に注目し、働きかけるデザインの考え方である。 対象をカタチになそうと取り組むプロセスが進展するに応じて、取り組む人同士で経験される相互への働きかけ合いの中から、人が自ら関わり、その取り組みを自分ごととして主体的に動いていく状態が生まれることを重視する。	KKD モデル²⁾ 5 ステップ図 
特徴： ・「対象のデザイン」と「人への働きかけ」を分けず、同じ機会を捉えて同時に進める ・導入段階で「内外の観察」を行い、外の事象を観察しつつそれを捉えている自分の内の感じ方を自覚し、この感覚をもとに「自分を使う」ことを、後に続く実践のプロセスの土台とする ・連続する一連のプロセス全体を経験する中で得た実感を起点に、取り組みが自走していくことを目指す	

II. 山背古道の取り組み概要

以下に山背古道関連の各種事業や取り組みの概要を記す。表2および図1に記す活動の正式名称には「山背古道」を冠していない取り組みも一部に含まれるが、山背古道推進協議会と山背古道探検隊による各種事業推進の過程において、同エリア内にて相互連携のもと、関係者や協力者によって企画され別途予算化されたなどの、関連の高いものを記している。

表2. 山背古道 取り組み概要

- ・ **実施年**：1994年（※）～現在 ※研究会活動期を含む
筆者が主に関わったのは1994～2005年の10年余
- ・ **場所**：
京都府南部に位置する城陽市・井手町・山城町・木津町の1市3町にまたがるエリア（当時※） ※現在は山城町と木津町は木津川市として合併
- ・ **実施主体**：
山背古道推進協議会（城陽市・井手町・山城町・木津町による、以下「協議会」）、京都府、山背古道探検隊（住民有志による、以下「探検隊」）、地域住民、商工会議所・商工会、商店主、教育委員会など
- ・ **取り組み概要**：
4市町を貫く「山背古道」という全長約25kmの1本の散策道を軸に、観光地ではない地域で、「歩くこと」を通して楽しみながら町の魅力を発見し、人と人が出会い、ゆるやかに連携しつつ交流し、誇りの持てるまちづくりを目指した。その中心となるコンセプトが「探検」である。事業立ち上げ当初より「住民参加」を標榜し、行政による協議会と、地域住民有志による探検隊を2つの核として、多様な人がそれぞれの関わりどころを見つけながら活動が広がっていった。協議会が主催するウォーキングやシンポジウムなどのソフト事業に加え、探検隊による「お茶探検」「梅探検」などの自主的な取り組みが相互に連携して展開された。さらには商工会・会議所が別途事業化し、地域の商店などが山背古道沿線の休憩スポット設置や特産品開発などを行い、また、市町がポケットパークやまちづくりセンターなどのハード整備を行うなど、多様な主体者による事業や活動が重なり、展開されていった。
- ・ **筆者の関わり**：
事業立ち上げ前の行政関係者による「研究会」から企画・デザインを担当する専門家として参加。協議会からの委託を受け、散策道の選定や、地域のキーマン訪問、各種探検の立ち上げなどに関わる。また、探検地図やシンボルマーク、かるたやサイン等の「参加」を促す仕掛けをデザインし、各種のワークショップや交流イベントを企画・運営。活動の進展に伴い、直接的にデザインを行うのみならず、関わる人が主体となる活動を支えながら関与。また、地域の商工会や会議所による独自事業、行政によるハード整備事業などの関連事業も並行して受託するなど、専門家として企画・デザインを行う一方で、探検隊の一隊員として各種の自主企画活動に参加した。



山背古道を散策する人たち



1市3町を結ぶ山背古道（筆者作成、リーフレットより）

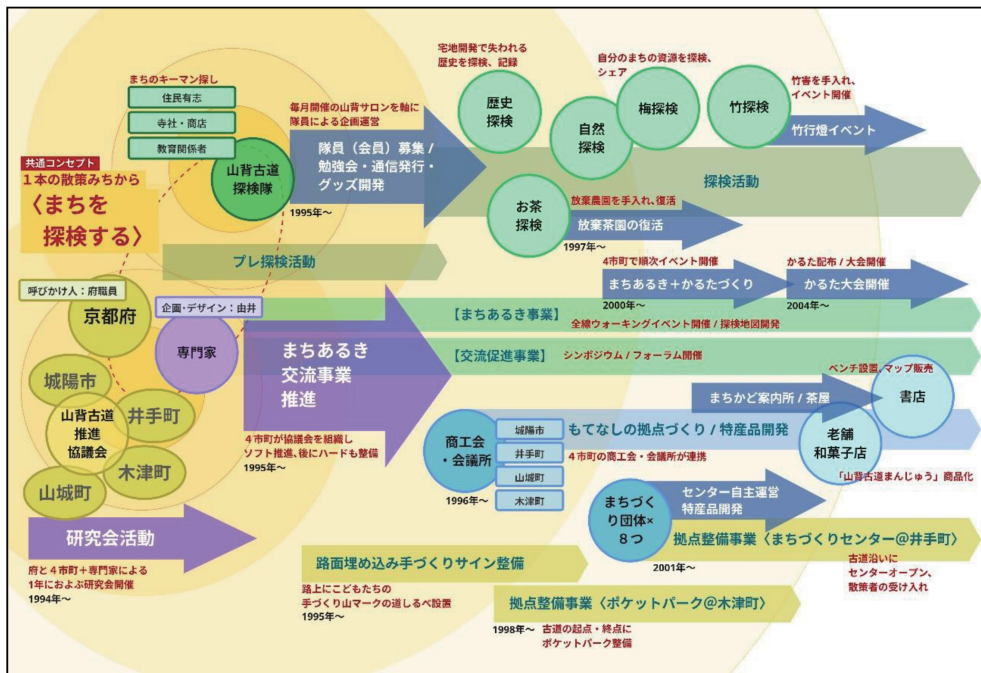


図 1. 山背古道 取り組み全体の流れ (筆者作成)

Ⅲ. 取り組みの実際とデザイン行動

1. 山背古道と「探検」の立ち上がり

山背古道は、京都府からの呼びかけをきっかけに、4つの市町が連携して事業化する形になった取り組みである。

当時は、「共創」や「ワークショップ」といった言葉は一般的ではなく、参加型のまちづくりを標榜しつつも、どのように進めるべきかが見えているわけではなかった。事業化に至る前段階として、京都府と4市町（当時）が1年にわたり計7回の研究会を開催し、この会議の場に京都府の職員より「探検」というキーワードが提示された。

後に山背古道事業の核となる重要な概念であるが、この時点では研究会参加の行政関係者も、デザインの専門家として参加していた筆者にとっても未知の概念であり、提示した府の職員自身も経験がなく、「やってみる」ことを通して少しずつ立ち上がっていった概念である。

研究会時代を含む取り組みの初期に、有志の自主活動として、実際に歩いてみる、面白がってみる、感じたことを共有する、といったことを重ねる中で、「探検とはこういうものかもしれない」という感覚が、関係者の間で徐々に醸成され、共有されていった。筆者は事業関係者のみならず、当時の職場の同僚や友人らと実験的に「探検」を企画・実施し、まちを歩き、目の前の友人たちの反応から「このように楽しめるものなのか」と手応えを確認していった。

また、筆者はこの時期、探検活動になんらかの接点を見いだしてくれそうな地域のキーマン

となる人たちを、複数回にわたり、行政の研究会メンバーとともに一軒一軒訪ねていった。寺社や商店、教育関係者など、それぞれに地域との関わりを持っている人と話をし、「山背古道」というアイデアを共有していった。ここでは、あらかじめ決まった計画を伝えるというよりも、「こういうアイデアがあり、こんなことができるのでは」という話を起点に、それぞれが関わりどころを見つけていくような相互対話的な進め方とした。

これらを経て、行政による協議会と、地域の住民有志が中心メンバーとなった探検隊が同時に発足し、以降、2つの核として取り組みを牽引することになった。

表 3. 立ち上げ期の取り組みと関わり

トピック	概要	筆者の関わり	デザインのポイント
研究会の発足・運営	事業立ち上げに先駆け、行政関係者との勉強会の開催	提案の可否判断を求めるのではなく、フラットな状況からともにその場で検討し、回を重ねる中で事業イメージを徐々に形づくっていった	未知な概念である「探検」や「ワークショップ」をあえて実践の場に持ち込み、一緒にやってみるしかない状況で自分たちのものとする
探検としてのまち歩き実験	行政担当者や住民有志、同僚や友人とまち歩き実施	「探検」を冠に、観光地でないまちを本当に楽しめるのか、様々なメンバーと一緒に歩く機会をつくり、互いの反応を確かめ合った	目の前の人と反応を受け止め合い、面白がり合う実体験を通し、関係者の間で手応えを相互に確認し、可能性の実感を共有していく
キーマン訪問	地域の寺社・商店・教育関係者などを一軒一軒個別訪問	まだアイデアレベルの山背古道の話を持ちかけて対話し、それぞれの関わりどころを探り、その都度プランに柔軟に取り込んでいった	個別に各人の「ホーム」を訪ねることで、疑念も含めて思うところを話してもらいやすくし、声をもとに1人1人に合わせた接点をつくる

2. 歩きながら見えてきたこと

①山背古道ルートの再発見

山背古道の取り組みの大きな特徴の一つは、「歩くこと」が中心にあったことである。本取り組みは散策道としての道の特定に始まるが、あらかじめ山背古道という決まった道があったわけではない。旧街道やそれ以前の古道をトレースできる区間はそれをなぞったが、不明な箇所も多く、あらためて選定する必要があった。その際、地図上で決めるのではなく、全線を実際に歩くことで「再発見」していった。すなわち、歴史的・観光的な資源を押さえつつもそのみではなく、ゆるやかに曲がる道やアップダウン、適度な細さ、視界が開ける場所、庭先の果樹など、歩く中で体感される面白さを手がかりにしてルートを選んでいった。

このプロセスは探検の実験を兼ねており、行政関係者や筆者および有志の参加者が、自身の五感のセンサーを使って楽しむことができるかどうか、実際の反応を重視したものであった。

②白地図の役割

探検時にベースとする地図に、筆者は、一般的な観光地図とは異なり、観光やサービス施設等の情報の記載のない白地図を用いた。デフォルメされていない、縮尺一万分の一の正確で緻

密な地図であり、道の形状や等高線・地図記号などの基礎情報のほかには山背古道ルートのみがプロットされたものである。あえて白地図としたことで、使う人が歩きながらルートの先に現れる次の展開を想像し、読み解き、進むにつれ目の前に現れたものを自身で感じ取って、それを白地図上に書き込み、自分だけのオリジナルな地図としていくことをねらいとした。

「探検地図」と称したこの地図は、探検の実験段階では青焼きコピーをつなぎ合わせたプロトタイプを用い（図2）、後にこのコンセプトのまま全長25kmを178cmの長尺の紙面に印刷して探検の基礎ツールとした。まち歩きイベントに「白地図」を用いることが自体が試みであったが、この地図の「面白さ」も、少人数での実験的なまち歩きの中で、使ってみる、使ってみてもらうことで身を以て確認していったものである。



図2. 探検地図のプロトタイプ

③探検活動の発足

「探検」もまた、最初から定義されていたわけではなく、関係者と実際に歩くことをきっかけに、まちのどんな要素をどのように楽しめるのかを体感的に探っていった。その中で、まち歩き活動のみならず、まち歩きから発展し、地域の魅力を積極的に「発見」し、それを「宝物」として楽しみ合う、勉強会やものづくりイベント等の様々なタイプの活動をも「探検」と位置づけ、都度新たな探検活動を次々に創り出していった。

このプロセスにおいて、関心の向き方は人によって異なり、歴史に興味を持つ人もいれば、茶畑や自然、人の暮らしやなりわいに関心を持つ人もいた。その違いがそのまま探検のテーマとして現れ、歴史探検やお茶探検、竹探検や梅探検など様々な探検活動が立ち上がり、中にはグループ活動として継続的に独自のメンバーを増やしていくものも現れた。

この時期、筆者は、自身で企画した探検イベントを主催者として実験的に運営したり、他者が中心となって準備したイベントに一参加者として参加するなど、様々な立場で立ち上げに関わり、複数の活動同士の情報交流にも寄与した。

表4. 歩くことを通して形づくられたもの

トピック	概要	筆者の関わり	デザインのポイント
道の選定	実際に歩いてルートを選ぶ	様々なメンバーと一緒に歩き、彼らの反応や筆者自身が感じる面白さをもとにルートを選定した	歴史など一般的な資源以外に、実際に五感で感じた面白さをもとに、自分たちなりの価値観を尊重する
探検用の白地図	施設情報のない、正確な白地図を使う	地図のコンセプトデザイン／手作りのプロトタイプを使ったまち歩き実験による検証と、配布版の制作	余白だらけの地図で、使う人の能動的な想像を誘う／書き込んで自分だけのオリジナルの地図になる
探検活動の発足	歴史・お茶などテーマごとに立ち上げ	実験的探検イベントの企画・主催／他者が立ち上げる探検活動のサポート／活動相互の情報共有	様々なテーマ・関与度の活動を多数同時に実施することで、人ごとに違う動機や距離感の受け皿とする

3. 会議からワークショップへ

取り組みの中では、会議のスタイルも変えていった。

当時、住民参加型を標榜しつつも、それを牽引する行政関係者の多くが「ワークショップ」という言葉も知らず、筆者もまた、意味は知っていてもほぼ経験のない状態であった。そんな中、筆者は事業を検討する研究会の会議に、ワークショップを実践により持ち込んだ。

従来のように、担当者や専門家が提案を結論まで提示して承認を得るという形ではなく、話題ごとにあえて大半を余白としたボードを用意し、参加している行政関係者の何気ない発言を筆者がフセンに書き取ってその場でボードに貼っていく、というスタイルで進めた。誰かがあらかじめ用意した完成案の是非を問うのではなく、「その場で」参加している全員がひとまずの意見を出し合い、出てきた案に相互に触発されながら徐々に創り上げていく、というスタイルである。次第に自分で手を動かしてフセンに書いて貼る人も現れ、「ワークショップとはこういうことか」と、やってみることで関係者が自分たちのものとして獲得していった概念である。

ツールにも小さな工夫を施した。あえてボール紙の裏側をボードとして用い、繊維の毛羽だった灰色のラフな面にフセンを貼っていった。「きれいに」整えた資料を用意するのではなく、ラフな裏面に手書きで検討テーマを書き込み、サンプルとして筆者のアイデアを書いたフセンを数枚貼った以外は余白だらけの「美しくない」「未完成な」ボードを示すことで、参加者が手を出しやすい状況をつくった。

まずは行政担当者による山背古道事業全体の企画会議という、本当に進めなければならないと参加者全員が自覚している「のびきならない³⁾」実践の場で、「ワークショップ」を手探りで立ち上げ、筆者を含む関係者が、その概念を自ら体感した後に、住民参加のあらゆる現場へと様々な形を取りながら拡大していったのである。

表 5. 会議から始めたワークショップの工夫

トピック	概要	筆者の関わり	デザインのポイント
会議の進め方	会議の場を実質ワークショップへ変更	提案の承認を求めるのではなく、テーマを用意して問いを投げかけた／ファシリテーションを行い参加メンバーの意見を促し拾い上げた	正解不正解にこだわらず、その場の思いつきから出してもらい／互いに触発し合いながら徐々に作り上げていく感覚を体験してもらい
意見の扱い	ふとした発言を見える化・共有	優劣の判断をせず、出た意見はすべて拾い上げ、フセンに可視化／まずやってみせることで、自分でも書いて貼ってみよう促した	すべてを拾い丁寧に扱うことで、安心感を提供／一つ一つにリアクションし、ささいな意見でも出しやすくする、まねしてみようと思ってもらい
道具の使い方	ボール紙の裏などを使う／余白を設ける	あえて整えていないツールや場、資料を用意した／一部分、本気のサンプルをつくり、「つくっている途中」の状態を見せた	余白だらけの、きれいな道具立てで「ラフなやり取りをする場」「間違っても平気」と思ってもらい、手を出しやすくする

4. 参加の裾野を広げる仕掛け

探検隊が発足して後も、引き続き地域内外の様々な背景を持つ住民や異なる主体に、参加の裾野を広げていくことが重要であった。

筆者自身、当時、企画・デザイン・イベント運営を担当する専門家として、いかにすれば「参加」が促進されるかということを念頭に置き、いくつもの仕掛けを次々に実験し、実践していった。表6に特徴的な事例を記す。

表6. 参加の仕掛け例

①「山マーク」の設定 山背古道のシンボルである通称「山マーク」は、専門家がデザインした特定の一つの形状をそのままコピーして用いるのではなく、3つの先端を持つ山形を描いて丸で囲めばすべてが山背古道のマークである、と定義した。これにより、誰が描いてもそれらがすべて正しいマークとなる。正解を固定せず、誰でも参加できる余地をあらかじめ組み入れた。	
②路面埋め込み陶板サインづくり 地域の子どもたちが粘土板に思い思いの山マークを彫り、それを焼いて「山マーク入り陶板サイン」を作成。古道ルート上の要所の路面に道しるべとして計433箇所設置した。ルート上のどこに自分のマークがあるか、家族と一緒に探しながら歩ける、参加や関心が持続する仕掛けとした。	 手づくりの山マークの陶板サイン
③山背古道かるた 古道沿線の4市町でまち歩きイベントを行い、その中で発見した「地域の宝物」を、かるたの絵札と字札のペアで参加者に表現してもらった。212点の応募の中から、7歳から72歳までの多世代の描き手による47組の札を選び、かるたセットとした。いろは48文字のうちの最後の一组はあえて白札とし、かるたセットを受け取った人もまた一参加者として自分で描き入れることで、初めて完成する仕掛けとした。	 「ぬ」の一组が白紙のかるたセット 「ぬけた札あなたがつくってかるたが完成」
④名札と「おなまえ」記入欄 イベントやワークショップの際には、全員に名札を付けてもらった。ゲスト登壇者やワークショップ参加者だけでなく、運営スタッフや行政担当者なども「裏方」ではなく名前のある個として場にいることを意識づけ、居合わせた全員が立場に埋没せず、フラットなコミュニケーションと関係性が生まれることを意図した。 また、探検地図などのツールには「おなまえ」記入欄を設けた。名前を記入することで、通常の観光マップなどとは異なり、自身が書き込み、使い込んで「自分のもの」へとしていく仕掛けとした。	

5. 多様な主体による活動の広がり

協議会によるウォーキングイベントやシンポジウムの開催、探検隊や有志による種々の探検活動を重ねる中で、山背古道の活動は徐々に広がり、新たな取り組みの派生や、異なる主体者が別事業として新規に予算を獲得し実施する活動が生まれていった。表7にそれらの事例の一部を記す。

なお、これらの取り組みの連携の核である協議会と探検隊は、1995年の発足以来、現在も活動を続けている。

表 7. 多様な主体による活動例

① 山背古道探検隊と探検活動

山背古道探検隊が発足して後も、いくつもの探検活動が立ち上がっていった。探検隊のいわば本隊により定期的に企画・実施されるものもあれば、一隊員が新たに企画し、発展してグループ活動へと至ったものもあり、メンバーも関わり方も異なる活動が並行して存在していた。

- ・歴史探検：歴史資源を訪問し現地でレクチャーを開催するなど、沿線の歴史を学び楽しむ。
- ・お茶探検：放棄されていた茶畑を再生し、年間を通して茶園の手入れと多様な茶文化を楽しむ。
- ・竹探検：増殖する竹藪を整備し、伐採した竹を行燈にしてイベントするなど活用までを楽しむ。
- ・梅探検：梅林の景観と食文化・歴史を学び楽しむ。（ほか 自然探検、酒蔵探検、山背の色探検など）

展開期には、筆者は主導的に動くのではなく、活動ごとに現れるリーダー的な動きをサポートしたり、「出席率の高い一隊員」としてネットワーキングを行うなど機能した。

② 山背古道通信

古道沿線の情報や探検活動の案内、参加者の声である「探検報告」などを紹介するミニ情報紙。実験的に筆者がスタートさせたが、自分なりの関わりどころを探していた探検隊のメンバーに引き継ぎ、以降、自主的に制作され数年にわたり計 17 号が発行された。

③ 実践主体の広がり（商業・施設）

古道沿線 4 市町にある商工会と商工会議所の 4 団体が、山背古道の取り組みを地域の商業に活かそうと連携し事業を立ち上げ、

- ・まちかど案内所／まちかど茶屋の設置（計 20 箇所）
- ・特産品開発

などを協議会と連携し推進した。具体的には、古道沿いで

- ・書店がベンチを設置し、山背古道通信を置き探検地図を販売し、古道散策の休憩場所に

・老舗和菓子店が山マークを焼き印にして「山背古道饅頭」を開発、販売など、商店と来訪者の接点が増えていった。

筆者は商工会・会議所とともに計画策定に関わり、まちかど案内所／茶屋に設置するツールや広報物のデザインなどを行ったが、推進は主として地域の商工会・会議所によってなされた。



和菓子店店頭のまちかど案内所のれん

④ 棚田の価値の再発見とまちづくりセンター整備

古道が通る井手町では、古道ルート上に広がる棚田景観の中に、まちづくりセンターを建設する計画が実施されることとなった。計画前の検討プランでは、敷地である 3 枚の棚田をならしてセンターの建屋をつくる案であった。しかし山背古道を実際に歩いた人たちの「棚田がいちばん良かった」との声を聞く中で、地域の人たちは自分たちにとって当たり前だった風景の価値を再発見し、その結果、棚田の段差や石垣を残し、できるだけ活かしたプランへと方向転換していった。

具体的には井手町で活動する、歴史を守る会や陶芸クラブ、スポーツクラブなど 8 つの自主活動団体が、2 年間で計 8 回のワークショップを通し、

- ・桜祭りや山背古道ウォーキングで休憩する
- ・縁側でくつろぐ／囲炉裏で過ごす
- ・かまどで炊いたご飯を提供する
- ・前庭で市を開催する

といった「実施したいシーン」「過ごしてもらいたいシーン」を出し合い、活用および運営と、それを叶える空間設計を同時に構想し、進めていった。

筆者はワークショップの企画・運営とセンターのハード設計を行い、8 団体による年間運営計画の策定をアシストしたが、センター完成後は完全に地域の主体者たちによって運営されていった。地域の団体が曜日ごとに交替して鍵を開け、自分たちの活動拠点としながら同時に来訪者をもてなす場として交流と自主活動が展開された。運営メンバーはその後変わりながらも、山背古道ウォーキングの際には中継拠点となるなど、今もまちづくりセンターとして運営されている。



棚田の中、山背古道沿いにオープンしたまちづくりセンター

IV. まとめと考察

1. 大きなプロジェクトの小さな現場で

山背古道の取り組みは、行政による広域的な事業として構想され始まった、全体として大規模なプロジェクトであった。しかし実際には、その内側で、数多くの「小さな現場」が立ち上がり、顔の見える距離感の中で、その一つ一つの反応や手応えを積み重ねながら進行していった実践であった。

筆者自身も、立ち上げ当初は「探検」が未知であり、「ワークショップ」もほぼ未経験であったと述べた。それでありながら、今後複数年にわたり広域で実施することになる「大きな」事業がスタートしたとの認識はあり、「参加」とは何か、どうすればそれは起こるのか、正解のない中で、誰も経験したことのない考え方と手法を試していた。取り組みが進展するごとに、次々に現れる初めての状況に、常に手探りし続けることへの負荷を感じていた。

そんな中、それでも次に打つ手を途切れることなく繰り出していくことができたのは、要素所所の「小さな現場」での共創の手応えがあったからとふり返る。ここで、自身のアイデアがいけるな、との手応えを得たり、新たな発想や担い手と出会ったり、都度共有し合える様々に異なる相手との小さな場が数多くあったということである。

2. 「やってみる」ことで立ち上がる概念

これらの「小さな現場」では、「やってみる」ことの反応を通して、自分たちなりの意味や概念が立ち上がり、共有されていった。

中でも「探検」は、当初、まちづくりのテーマとしては不適切では、と危ぶむ声があった。自分たちのまちがまるで未開の地であるかのようなイメージを持たれないか、との懸念である。また、まちづくりに遊び心を盛り込むことへの心理的抵抗も見られた。これらの不安は、ロジックによる反論によってではなく、小さな実践が蓄積されることによって、次第になじんでいった。

立ち上げ当初、自分たちのまちには「何もない」と自認する住民たちも少なくなかった。そこをフィールドに、「探検」という言葉のもと、実験的に参加していた地域の親子連れや高校生、都市部の大学生など若い世代を中心に、まちの魅力を「宝物」として探し出し、楽しみ合う姿を実際に目の当たりにすることで、その感覚と、プラスの意味での可能性が、関係者たちに受け止められていったのである。この、新たに意味づけられた山背古道なりの「探検」は、ほどなく当たり前の言葉として広く地域で用いられることとなった。

3. 多様な主体による自律的な活動へ

他方、探検をキーワードとした地域での新たな動きに「参加」を求められた住民にしてみれば

ば、これらの取り組みは業務ではないため、それぞれが関わるに足る理由、言い換えれば「動機」がないとそもそも成立しないものであった。そのため、筆者らは様々な切り口で、様々な関わり方のできる場を、小さな現場ごとにアレンジし続けることとなった。

結果として、ウォーキングイベント等への参加といった軽い関わりから、さらに一步進んだテーマを掲げた各種探検の企画・実施や、個別商店による特産品開発など自主的な取り組み、まちづくりセンターの運営など、規模や目的の異なる幅広い参加の場が、数多く古道沿線の地域に現れることとなった。

これらの活動は、当初は行政や商工会、筆者などからの働きかけがあったものの、やがてそれぞれに多様な主体によって立ち上がり、自律的に継続されていった。特定の計画や指示によって統制されたものではなく、そこでは、様々な人が自分なりの接点を見つけ、自分にとって意味のあるテーマや距離感で、主体者として動き始めていく状況が起きていた。

こうして、活動ごとに異なる主体や関わり方が並行して存在することとなり、筆者自身も、展開期には主導的に動くというより、それぞれの活動の間をつなぎ、必要があればサポートするほかは、一参加者として取り組みを楽しむ立場へと変化していった。

中には、お茶探検のように、一隊員からの呼びかけをきっかけとして、放棄されていた茶畑の自力再生から始まり、現在まで30年近く継続している活動もある。それらは、いわば「やらされる参加」とは異なり、関わる人自身にとって面白さや価値を感じられるものとして立ち上がり、続いていったのである。

4. 動機的设计へ

これらの経験が、「動機的设计」へと凝縮していくのはずっと後のことである。

「動機的设计」は実践から試行錯誤を経て導出したデザインプロセスモデルであると、その初出以来述べてきた。一連の考えをプロセスモデルへと統合していく過程では、「内外の観察」や「自分をを使う」など、筆者にとって、すでに自明とも感じられるようないくつかのデザイン行動の概念があった。当時は明示的に把握していたわけではないが、山背古道の取り組みの中で経験していたところが大きかったとふり返る。

また、山背古道では、「誰かに参加してほしい」「まちづくりの担い手になってほしい」と意図し、計画したからといって、それがそのまま実現するわけではないということも、繰り返し経験していた。「大きな計画」を進める一方で、「小さな現場」のありようが重要であったのは、その実践の容易ならなさゆえでもあった。手応えの見える「小さな現場」はデザイナーである筆者にとって必要であり、そこで繰り返されていた小さな工夫や働きかけは、都度反応を得られる環境で、いわばデザイナーの「習性」として、自然に、半ば無自覚に実践され続けていたのである。

このように、山背古道の取り組みには、後に「動機的设计」として整理される考え方の原点となる課題と実践が、すでに数多く含まれていた。本稿ではその一端を記述するに留まっ

たが、今後は、こうした数々の小さな実践をあらためて整理し、「動機的设计」の視点からどのように捉え直すことができるのか、考察を進めていきたい。

【注】

- 1) 2017年9月開催の第3回 Xデザインフォーラムでのパネル発表「『動機的设计する』主体者が生まれるコミュニティデザインの現場から」
- 2) モデル図全体が一本の矢印になっており、左側を上流として、右側に向かってデザインプロセスが進んでいく。矢印形状の上側は、対象となるモノ・コトのデザインを、下側はそれを支える人である当事者への働きかけを表しており、これらを一つの矢印の上側面と下側面として表現することで、両者は別々のものではなく、一体に進んでいくことを示している。このプロセスは5つのステップを経て推進するが、その最初のステップが「内外の観察」である。対象のデザインでは「価値（頭文字：K）」を見つけ出し「カタチ（K）」へと具現化していくこと、また、これを推進すると同時に、実施する人の「動機（D）」に働きかけていくことから、これら3つに注目し、「KKDモデル」と呼んでいる。初出は2019年。
- 3) 動機的设计がより効果的に機能するには、取り組む課題が、練習課題など架空のものではなく、そこにいる人たちにとって必要に迫られた「のびきならない」課題であることが重要であるとしている（由井，2019）。

【参考文献】

- 井手町（2001）『住民主体のまちづくりセンター ワークショップ 基本設計 報告書』
- 井手町（2003）『住民主体のまちづくりセンター 活用にむけて 事業報告書』
- 山背古道推進協議会（1996）『山背古道基本計画等策定調査 報告書』
- 山背古道推進協議会（1999）『地域間交流推進プログラム 報告書』
- 山背古道推進協議会（2005）『山背古道かるた事業 報告書』
- 山背古道お茶探検隊（2005）『手づくりのお茶を楽しむ 山背古道お茶探検隊が指南するマイお茶のススメ』文芸社
- 山背古道を活用する広域経営改善事業推進委員会（1997）『広域経営改善普及事業 報告書』
- 由井真波・小野文子（2019）「動機的设计 —当事者を主体者に変える、現場的设计実践モデル—」ヒューマンインタフェースシンポジウム 2019 対話発表予稿，pp.570-577
- 由井真波・小野文子（2021）「小さな現場のためのデザインプロセスモデル —カタチ・価値・動機の3視点から—」HCD-Net 機構誌／論文誌『人間中心設計』第16巻第1号，pp.21-29
- 由井真波（2021）「『感性なんてわからない』人と取り組む、動機的设计 —当事者を主体者に変える、実践プロセス—」『暮らしにおける感性商品 感性価値を高めるこれからの商品開発と戦略』長沢伸也編著，晃洋書房，pp.151-164
- 由井真波（2022）『動機的设计 現場の人とデザイナーがいっしょに歩む共創のプロセス』BNN

The Practice of 'Yamashiro Kodo' and the Origins of 'Designing for Motivations'

– From Small Sites within a Large-Scale Project –

Manami Yoshii*

Fumiko Ono**

Abstract:

This paper reflects on the practice of "Yamashiro Kodo," a regional community development project in which the author was involved as a planning and design specialist from its inception roughly 30 years ago. Through this descriptive account, the paper seeks to identify the origins of the concept that later developed into "Designing for Motivations."

The "Designing for Motivations" approach emphasizes the autonomy and self-directed engagement of participants, and past studies have discussed its practice on the premise of "small sites" such as bookstores or traditional Japanese confectionery shops. On the other hand, the Yamashiro Kodo project—initiated by local government—presents an apparently large-scale project as a whole. Over 30 years, a diverse range of actors, including local residents and businesses, have loosely cooperated to generate unique, long-lasting initiatives.

Initially, although resident "participation" was championed, most stakeholders had no prior experience with workshops, and the core concept of "exploration" (tanken) began entirely through trial and error. Through repeated experimental trials, however, numerous autonomous activities with distinct engagement styles emerged and expanded around this exploration process.

Since the launch phase, the author contributed by selecting routes, managing exploratory activities, designing tools like blank maps and embedded path markers, and engaging with stakeholders. Rather than one-way leadership, this was a continuous process of open-ended exploration, expanding incrementally by responding to mutual feedback. The arenas for this practice were a multitude of "small sites," where the mix of participating faces varied each time.

This study suggests that this early design practice, though unselfconscious at the time, encompassed the experiments and ideas that link to the subsequent "Designing for Motivations." These reflections aim to provide a foundation for further academic inquiry.

Keywords:

Designing for Motivations, Co-creation, Autonomous activities, Small sites

* Representative Director, Link Community Design Laboratory Co., Ltd. / Visiting Professor, Seian University of Art and Design

** Planner, Link Community Design Laboratory Co., Ltd.

